

論文

——シンポジウム2「ヴィクトリア朝の書簡——国政から私信まで」

『ザ・タイムズ』——新聞という手紙

小宮 彩加

新聞の名前には、*Daily Mail*や*Washington Post*といったような郵便と関係のあるものが多いが、これは新聞と郵便が歴史的にとっても関係性が強かったことの名残である。新聞の前身の出版物が「ニューズレター (newsletter)」と呼ばれていたのも、文字通り、ニュースを知らせてくれる手紙だったからである。ニューズレターは、郵便の特別無料制度を利用して地方に郵送されていたので、発行は郵便配達日に合わせて週3回だった。1712年以降、新聞に課税されるようになると、納税済みの新聞にはスタンプが刻印されるようになった。その納税済みを示すスタンプが、便利なことに郵便切手の役割を兼ねていた。それ故、スタンプ付きの新聞は郵便代を払うことなく、あちこちへ自由に郵送されていたのである。このように、新聞には、長い間、一種の郵便物として扱われてきたという歴史がある。



(図1) *The General Post Office, One Minute to Six* (1860) by George Hicks © Museum of London

ジョージ・ヒックス (George Hicks, 1824-1914) の絵に、“General Post Office, One Minute to Six” (1860) という作品がある(図1)。当時流行していた群像風俗画で、窓口が閉まる18時の1分前の中央郵便局の騒々しい様子が詳細に描かれている。この絵の元になっているのは、ジョージ・オーガスタス・サラ (George Augustus Sala, 1828-1895) の本の挿絵である。*Twice Round the Clock, or The Hours of the Day and Night in London* (1859) という、1時間刻みにロンドンの日常のシーンを切り取って書かれた本の18時直前の郵便局の章の挿絵も同様の構図で、新聞用投函窓口に向かって、大慌てで新聞の束を運ぶポスト・ボーイが描かれている (Sala, p. 232-35)。

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) も、*Household Words* 創刊号の中で閉局時間直前の様子を次のように面白おかしく描写している。

Now and then there was a girl; now and then a woman; now and then a weak old man: but as the minute hand of the clock crept near to six, such a torrent of boys, and such a torrent of newspapers came tumbling in together pell-mell, head over heels, one above another, that the giddy head looking on chiefly wondered why the boys springing over one another's heads, and flying the garter into the Post-Office with the enthusiasm of the corps of acrobats at Mr Franconi's, didn't post themselves nightly, along with the newspapers, and get delivered all over the world. (“Valentine's Day at the Post Office,” p. 9)

ここでも、郵便局が閉まる前に何とかして新聞の束を投函窓口に放り込もうとするポスト・ボーイたちの殺気だった様子が生き生きと描写されている。新聞は、毎日、郵便局から配達されていたのである。

本稿では、新聞の「郵便物」や「手紙」としての側面に焦点を当てることにする。とりわけ注目したいのは、ヴィクトリア朝時代に大きな力を持っていた『ザ・タイムズ』の名物コーナー“Letter to the Editor”である。編集長に宛てた手紙である投書が、いかに世論を動かすようになっていたか、いくつかの例を挙げながら考察したい。¹

* * *

まずはじめに『ザ・タイムズ』の歴史を簡単に振り返ろう。『ザ・タイムズ』は、1785年に*Daily Universal Register*として創刊され、その3年後の1788年に名称を変更し、*The Times*となった。1803年に、創業者のジョン・ウォルター(John Walter, 1739-1812)の息子のジョン・ウォルター2世(John Walter II, 1776-1847)が会社を引き継いだのだが、彼は非常に優秀な経営者だったので、彼の時代にタイムズ社は大きく成長したのだった。

ジョン・ウォルター2世の功績は大きく二つある。一つ目は、最新鋭の蒸気式印刷機を導入したことである。ウォルター2世が、ドイツ製のケーニッヒ印刷機を導入したことで、それまで10時間かけていた新聞の印刷時間が3分の1の約3時間で済むようになったのだ。これによりニュースの締め切り時間を遅くすることができたので、他紙より新しい情報を新聞に載せることもできたのである。同時にコスト面でも、25%削減することができ、売り上げを大いに伸ばしたのだった。そして、政府からの補助金に頼らない経営ができるようになり、完全に自立した報道機関となることができたのである。

もう一つ、ジョン・ウォルター2世の功績と言えるのが、郵便局との戦いに勝利したことである。それまでは、外国のニュースを一番先に入手できたのは、郵便局だったのだ。郵便局は外国からニュースを仕入れるとその概要を作って、一番高値をつけた新聞や一番政府寄りの新聞に売り付けることで商売をしていたのである。しかし、自社で独自に情報収集したいと考えたジョン・ウォルター2世は、外国特派員を送ったのである。² 郵便局は特派員からタイムズ社に送られてくるニュースを途中で妨害したり、タイムズ社への郵便配達を故意に遅らせるなどして邪魔しようとしたのだが、タイムズ社は特別仕立てのクーリエや密輸船と契約してイギリス海峡を渡る独自のルートを築いて、郵便に頼らずに外国からのニュースを入手できるようにしたのである。このように、郵便局との戦いに勝利したことによっても、『ザ・タイムズ』は独立した新聞という地位を手に入れたのである。

さらに、ジョン・ウォルター2世の時代に、トマス・バーンズ(Thomas

Barnes, 1785-1841) と、続いてジョン・ディレーン (John Delane, 1812-1879) という二人の優秀な編集長を得たことで、『ザ・タイムズ』は最盛期を迎える。1850年ごろの四大新聞というと、『モーニング・クロニクル』(*The Morning Chronicle*)、『モーニング・ポスト』(*The Morning Post*)、『モーニング・ヘラルド』(*The Morning Herald*)、そして『ザ・タイムズ』だったが、『ザ・タイムズ』の出版部数は他の三紙の合計部数より多いほど、圧倒的な存在だった。ヴィクトリア朝中頃の『ザ・タイムズ』は、空前の繁栄を謳歌していたのである。

読者の支持を受け、権力者に臆することなく物を言う存在となった『ザ・タイムズ』につけられたニックネームは“Thunderer”(「警世の声を発するもの」の意)だった。そして、「我々の目はいつでも国民の方を向いている」というのが『ザ・タイムズ』の信条だった。³ 二代目編集長のトマス・バーンズも、権力者の顔色を伺うのではなく、「世論に耳を傾けるべきだ」という考えだったので、彼は“Letter to the Editor”コーナーを特に重視していた。バーンズの伝記を書いたハドソンは、「とにかく『ザ・タイムズ』に手紙を書いてくれ」と読者に促し、“Letter to the Editor”を新聞の看板コーナーに発展させたのはバーンズの功績だと述べている (Hudson, p. 90)。バーンズが編集長の間は、毎日何通もの投書が取り上げられていたのだった。

これらの投書は、ロンドンのプリンティング・ハウス・スクエア (Printing House Square) にあるタイムズ社まで手渡しで届けにいく人が多かったそう。ジョージ・オーガスタス・サラは、前述の *Twice Round the Clock, or The Hours of the Day and Night in London* の中で、『ザ・タイムズ』の印刷開始時間に間に合うように、明け方5時に編集長宛の手紙を持って何人もの人がタイムズ本社にぞろぞろとやってくる様子を書いている。

It is getting later, but there is no sign of diminution yet in the stream of cabs that drive into the Square. Every one who is in debt, and every one who is in difficulties, and everybody who fancies that he, or any friend, relation, or connection of his, has a grievance, and can put pen to paper, four letters together in orthography and four words in syntax, must needs write a letter

to the “Times;” and of the metropolitan correspondents of that journal, the immense majority themselves bring their letters down to the office, thinking, haply, that they might meet the editor standing “promiscuous” on the doorstep, and after some five minutes’ button-holding, secure, irrevocably, the insertion of their communications. I don’t at all envy the gentleman whose duty it is to open and read (do they read them all?) the letters addressed to the editor of the “Times.” (Sala, p. 35)

サラは「すべての手紙を読んでいるのだろうか」と訝っているが、編集長バーンズは、読者から届く手紙にはきちんと目を通したようだ。毎日『ザ・タイムズ』一面には、“To Correspondents”というセクションがあり、採用されなかった何通もの投書の差出人への編集長からのメッセージが並んでいた。

『ザ・タイムズ』には、無名の一般市民から著名人まで、ありとあらゆる人から投書が送られてきていた。本名を名乗っているものも、ペンネームのものもあり、中には連絡先として自分の住所を書いているものもあった。当時の作家たちの多くも『ザ・タイムズ』に投書をしていた。例えば、ジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-1880) は、『アダム・ビード』(*Adam Bede*, 1859)の作者の正体はナニートンに住むジョゼフ・リギンスだという投書を否定するために投書し(1859年4月15日、16日)、ジョージ・ギッシング (George Gissing, 1857-1903) は自身の作品からの無断盗用を報告するために投書している(1893年9月9日)。ディケンズも度々、『ザ・タイムズ』編集長宛に手紙を出しているのだが、ここではディケンズの1849年11月14日に載った投書を取り上げたいと思う。

TO THE EDITOR OF THE TIMES.

Sir, -- I was a witness of the execution at Horse-monger-lane this morning. I went there with the intention of observing the crowd gathered to behold it, and I had excellent opportunities of doing so, at intervals all through the night, and continuously from daybreak until after the spectacle was over.

(14 November 1849, p. 4)

このように始まるディケンズの投書は、ホースモンガー・レーン監獄で1849年11月13日に執行されたマニング夫妻の公開絞首刑を見物した直後に書かれたものである。マニング夫妻、すなわち、28歳のマリアと夫のフレデリックは、二人で結託してマリアの裕福な愛人パトリック・オコナー氏を自宅に招いて殺害したのだった。遺体を床下に埋めたのち、二人はオコナー氏宅に行き、金品を盗み出したのである。事件はすぐに発覚し、マリアはエジンバラで、フレデリックはジャージー島で見つかり逮捕されたのだった。夫婦で妻の愛人を殺害するというスキャンダラスな事件だったので、世間の注目を集めたのだった。

その有名な夫婦が揃って公開絞首刑になるということで、ホースモンガー・レーン監獄の周りには、処刑の前日からたくさんの見物客が集まっていた。最終的にはその数は3万人とも、5万人ともいわれている。周辺の建物の、絞首台がよく見える部屋が見物用に貸し出されたので、ディケンズも、ジョン・リーチ (John Leech, 1817-1864) やジョン・フォースター (John Forster, 1812-1876) などの友人たちとそのような場所を借りて、死刑見物をしたのだった。⁴ そして、見物後、すぐに『ザ・タイムズ』に投書を送ったのであった。

投書の内容は、公開絞首刑の前日から監獄前に陣取って浮かれ騒ぎをしていた群衆のおぞましい様子の描写と、低俗な大衆を刺激するだけなので、死刑は公開すべきではないというディケンズの意見だった。ディケンズは1846年にも、当時編集に携わっていた『デイリー・ニュース』で死刑を廃止すべきだという内容の一連の記事を書いている。⁵ 公開絞首刑は、やがて1868年に廃止されることになるが、そうなったことにはディケンズの影響は小さくなかったと考えられている。

しかし、興味深いことに、マニング夫妻の死刑見物後のディケンズの投書に対する『ザ・タイムズ』の投書の論調を見てみると、ディケンズとは反対の意見ばかりなのである。そもそも、ディケンズの手紙が載った14日の社説でも、『ザ・タイムズ』としてはディケンズには同意しかねるとははっきりと述べているのである。その社説の一部を引用しよう。

A great novelist, whose knowledge of the human heart and its workings under

the infinite varieties and accidents of modern life, needs not our praise, has sent us a letter describing his impressions on witnessing the execution. His language excites our admiration, but not our surprise. The scene is doubtless the most horrid, and apparently the most hardening, that can be imagined. We are not prepared, however, to follow Mr. Dickens to his conclusion. It appears to us a matter of necessity that so tremendous an act as a national homicide should be publicly as well as solemnly done. (14 November 1849, p. 4)

このように、絞首刑の様子を描いたディケンズの筆を誉めてはいるが、ディケンズの主張には全く同意できないと編集長は一刀両断している。死刑は公開した上で厳に行うべきというのだ。

この翌日からは、ディケンズの手紙を読んだ読者からの投書がしばらく続いている。最初に載ったのは、ペンネーム「マイロ」という読者からの次の投書だった。

TO THE EDITOR OF THE TIMES

Sir,- A striking letter from Mr. Charles Dickens, published in your paper of the 14th inst., will have been read with much interest.

It describes forcibly the degrading scenes he witnessed in front of Horsemonger-lane Gaol during the night and morning preceding the recent popular execution, if we may use the term; and he calls energetically upon Sir George Grey to use his influence with Parliament to put an immediate stop to such abominations. But I would submit that, in accordance with a prevailing sentiment, he carries his deductions too far, or does not sufficiently explain himself. (17 Nov 1849, p. 4)

ペンネームなので、これを書いた人物が誰なのか分からないのだが、ディケンズのような大作家に対してでも「説明が足りない」とはっきりと批判している。

このマイロの手紙を読んだディケンズはすぐに返事を書いている。マイロの手紙が載ったのが17日で、18日は日曜日で休刊日だったので、ディ

ケンズの投書は19日の新聞に載っていた。

TO THE EDITOR OF THE TIMES.

Sir, --When I wrote to you on Tuesday last I had no intention of troubling you again; but as one of your correspondents has to-day expressed a reasonable desire that I would explain myself more clearly, and as I hope I may do no injury to the cause I would serve by stating my views upon it a little more in detail, I shall be glad to do so, if you will allow me the opportunity.

(19 Nov 1849, p. 5)

先日の投書について「説明が足りない」と指摘されたので、もう少し説明させてください、と始まる手紙の中でディケンズは、公開絞首刑ではなく、24名の正式な見物人の前で処刑を行うという提案をしている。

面白いことに、このディケンズの2通目の投書の真横には、1通目のディケンズの投書に対する別の反論が並べられている。大作家ディケンズの投書も、ディケンズと反対意見の一般読者の投書も、同じ紙面に載っているのである。ただし、ディケンズの方が印字のフォントが1サイズ大きいように見えるので、若干特別扱いではあるようだ。

ディケンズの1通目の投書に対する反論の投書は20日になってもまだ続いていた。11月20日の社説で、『ザ・タイムズ』編集長はディケンズの投書から始まった公開絞首刑についての議論を総括しているが、ディケンズの投書は2通とも論拠が欠けていると述べている。

In his first letter the cardinal and all important statement, that “ nothing which ingenuity could devise to be done in the same compass of time could work such ruin as one public execution,” was a purely unsupported assertion, doubtless of a most sincere and conscientious belief, but still an assertion only; nor does he, in the present communication, attempt any further substantiation of the fact alleged than is contained in a private opinion. . .

(24 Nov 1849, p. 4)

さらに、限定的に公開する死刑というディケンズの提案についても、無理やり死刑を見せられる人はたまったものではないだろうと一蹴しているのだ。一方で、ディケンズの提案は、死刑制度廃止論者たちにも受け入れられなかった。社説では、急進派政治家で死刑廃止論者のジョン・ブライト (John Bright, 1811-1889) がリフォーム・クラブでディケンズの提案について、公開せずに密かに処刑するなどというなんて「誰かを殺したいだけではないのか」と言い放ったということも紹介されている。⁶

ディケンズの投書と、それに反論する読者との投書のやり取りを読むことにより、読者は公開絞首刑の問題についての賛成意見も反対意見も知ることになる。そして、最終的には編集長による総括の社説を読み、編集長が述べているように絞首刑を公開することには意義があるのだと確信するようになるだろう。これら一連の投書からは、『ザ・タイムズ』編集長がはじめから明確な答えを持って相反する立場の投書を載せていて、編集長の望む方向に世論をリードしていく様が見て取れるのである。

* * *

次に、『ザ・タイムズ』に投書が載ったことがきっかけで、実際に世論が動いた例を見てみよう。よく知られているように、『ザ・タイムズ』は世界初の戦地特派員としてウィリアム・ハワード・ラッセル (William Howard Russell, 1821-1907) をクリミア戦争に派遣した。「特派員」は英語で“Correspondent”というが、その名の示す通り、ラッセルは戦地から次々と手紙という形の記事を送ってきたのだった。もともと粗末な医療体制のところにコレラが流行し、その上寒い冬に向かっていた1854年の秋、戦地での状況は悲惨を極めていた。その様子は本国の『ザ・タイムズ』読者たちにつぶさに伝えられていた。1854年10月13日に『ザ・タイムズ』に載ったコンスタンチノーブルの特派員からのレポートでも、早急に医療体制を改善しなくては取り返しのつかない事態に陥ると警告している。実際、1854年10月から半年の間に現地の兵隊の35%がコレラにより死亡し、35,000人の部隊のうち、実際に戦える状態だったのは9,000人程度だった。すぐにでも状況が改善されなければ、冬を越すことができない兵士が大勢

出たことだろう。

戦地特派員からのレポートを受けて、1854年10月12日の社説で編集長ディレーンは『ザ・タイムズ』の読者たちに対して、何かできることをすべきではないか、と呼びかけた。

Every man of common modesty must feel, not exactly ashamed of himself, but somehow rather smaller than usual, when he reads the strange and terrible news of the war. Here we are sitting by our firesides, devouring the morning paper in luxurious solitude, lazily tracing the path of conquest on one of Arrowsmith's best maps, counting the days of Sebastopol, and imagining the look of the Czar as he finds that the key of the Euxine is wrenched from his hands. To us war is a spectacle, and, if we happen to have no friends engaged in it, a very amusing spectacle. . . What are we doing for the cause we have so much at heart? Is it right that these poor fellows should bear the whole of the burden? Soldiers and sailors are not savage, murderous, ravaging, and destroying creatures they are sometimes imagined. Till they are dying of hunger and thirst, or have seen their comrades falling all round them, they are the merest sheep in the world. The wolves are those who stay at home, blow up the angry passions of the war, and feed its perpetual resentments. Is it fit that the soldier should suffer everything, and we not at all? Or rather, is it fit that he should suffer anything that it may in our power to remove?

(12 Oct 1854, p. 6)

この社説の呼びかけの反響は大きかった。間髪を容れずに読者から援助の動きがあった。一つは、資金面の援助である。ディレーンの社説の翌日、タイムズ社にロバート・ピール (Robert Peel, 1822-1895) からの次のような投書とともに、200ポンドが届けられたのである。⁷

TO THE EDITOR OF THE TIMES.

. . . I would suggest, therefore, through the columns of The Times (and, indeed, an article I have just read in your impression of this day confirms me

in the believe that you will warmly second the suggestion), the immediate exercise of private benevolence. . . . I enclose a check for 200 l., and a like subscription from 40 or 50 others would, at once provide the necessary funds. A committee of five might be appointed to superintend the purchase of a few comforts, and, as delay would, of course, much lessen the value of the gift, in ten days, with success, a favourable opportunity might present itself for dispatching these to the hospitals of Constantinople or Sebastopol; . . .

(13 Oct 1854, p. 6)

このピールの呼びかけに応じてできた“The Soldiers’ Sick and Wounded Fund”には寄付がどんどん集まり、1週間後にはその総額は7,000ポンドにもなっていた。

さらに、ディレーンの社説を読んだ読者たちから、兵士の妻に看護の知識を教えて看護隊として派遣してはどうかとか、フランス軍に同行しているような看護隊を作るべきではないではないか、というような積極的な提案が次々に“Letter to the Editor”に寄せられたのだった。

そのような世論に後押しされたかのように、この時クリミア行きを決めたのがフロレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) である。ナイチンゲールは、『ザ・タイムズ』に書いてあることすべてが本当だとは信じていないけれど、何か私にできることがあるに違いない」(*The Story of the Times*, p. 80) という思いで、ディレーンの社説から1週間後の10月21日に38名の看護婦を率いてスクタリの野戦病院を目指し、出発したのだった。この時、『ザ・タイムズ』へのピールの投書から始まった寄付金を届けるために選ばれたジョン・マクドナルドも、ナイチンゲールと同じ船に乗って戦地に向かっていた。そして、その基金から約20,000ポンドを得て、ナイチンゲールはスクタリの病院を整えたのである。ナイチンゲールも、ナイチンゲールの病院も『ザ・タイムズ』への手紙のおかげで生まれたと言っても過言ではないだろう。

このように、クリミア戦争では、はるか遠方の戦地の様子を特派員の手紙という形の新聞報道でイギリス本土の読者は日々読んでいた。しかし、『ザ・タイムズ』が載せた手紙はそれだけではなかった。1840年には1ペニー

郵便も始まっており、この頃は誰でも簡単に利用できる郵便システムがあった。そのため、戦地の兵隊たちも『ザ・タイムズ』に手紙を送ることができたのだった。時には戦地の兵隊から家族に宛てて送られた手紙が『ザ・タイムズ』に転送されて載ることもあった。『ザ・タイムズ』の歴史をまとめた本には次のように書かれている。

Raglan's officers were great letter writers; and in those days there was no censorship. Delane, like Barnes, believed in checking on public opinion. These letters home, after reaching the families of men in power, had a cumulative effect; no doubt many reached Printing House Square.

(The Story of the Times, p. 70)

戦地の兵隊から『ザ・タイムズ』に送られた手紙と、兵隊の家族から転送された手紙が、『ザ・タイムズ』の正式な戦地特派員からの手紙を捕足する形で新聞に載り、クリミア戦争は報道されたのである。(Markovits, p. 45)

そのような中、ある一人の兵隊からの『ザ・タイムズ』への手紙がきっかけで、アレクシス・ソアイエ (Alexis Soyer, 1810-1858) はクリミアに行こうと決めたのだった。ソアイエは1837年から1850年までの間、名門紳士クラブ「リフォーム・クラブ」の料理長をしながら、ベストセラーの料理本を出版したり、彼の顔のイラストがラベルの瓶入りソースを販売したりしていて、誰もがよく知るセレブリティ・シェフだった。そのソアイエが、観劇後に入ったレストランで食事をしながら偶然手にした『ザ・タイムズ』に、次のようなクリミアの兵士からの投書を見つけたのだった。

There is one public character who has it in his power to do us a really good turn, that is by publishing in The Times a receipt or two of how to concoct into a palatable shape the eternal ration of pork and biscuit which is issued to us, and with which we are heartily tired. For my part, if the issue of pork goes on much longer I am afraid I shall soon begin to grunt—the bristles have certainly come out very strong. M. Soyer is the man I allude to as the public

character; and I am sure he will give us the benefit of his professional advice.

(16 Jan. 1855, p. 12)

連日、続けて配給される豚肉とビスケットに飽きて閉口しているので、何かこれを使ったレシピをソアイエさんに教えてもらいたい、と『ザ・タイムズ』を通してソアイエに名指しで依頼している投書だった。ソアイエはすぐにこれに答える形で、「兵舎スープ」をはじめ、配給の食材でできる5つの料理のレシピを考え、“Letter to the Editor”として『ザ・タイムズ』に送ったのだった。(22 Jan 1855, p. 10) これらのレシピは現地で歓迎されたようで、戦地特派員ラッセルも「新聞に載っていた配給で作る料理のレシピのおかげで大いに楽しんだ」(Russell, p. 219)と書いている。このように、『ザ・タイムズ』の“Letter to the Editor”欄を通すことで、戦地の兵隊とロンドンのシェフが双方向のコミュニケーションをとることも可能だったのである。

この出来事から約10日後の1855年2月3日、ソアイエは再び『ザ・タイムズ』に投書をし、自らクリミアに赴き、軍隊や病院の食事関連のことを手伝ってくると発表した。ソアイエはジャガイモ飢饉の時にはアイルランドに行ってスープ・キッチンを作り、ロンドンの貧民街でもスープ・キッチンを作るなどして、それまでも料理を通した慈善活動に熱心であった。また、キッチン器具やソアイエのブランドの調味料を発明して販売するなど、アイディア豊富な料理人だった。クリミア行きを決めた時も、まず最初に戦地に適した調理用ストーブを考案し、現地に届くよう手配したのだった。ソアイエのストーブは一台で、煮ることも、蒸すことも、焼くことも、なんでもできるとクリミアで共に働いたナイチンゲールも感心したという優れもので、その後100年以上もの間、英国軍で使い続けられたのだった(図2)。



(図2) 野営地のソアイエのキッチンのオープニングの日の様子。(Soyer, p. 214)



(図3) ナイチンゲールとソアイエはスクタリで共に働いていた。ジェリー・バレットのスクタリの病院の絵では、中央にナイチンゲール、左端にソアイエが描かれている。

Jerry Barrett, "The Mission of Mercy: Florence Nightingale receiving the Wounded at Scutari" (1857)

© National Portrait Gallery

ソアイエは、クリミアからも度々『ザ・タイムズ』に送り、戦地の様子を知らせていた。そして、配給品で作れる新しい料理のレシピを考えては、“To the Editor of the Times”として『ザ・タイムズ』に載せてもらっていた。『ザ・タイムズ』はどの部隊にも配達されていたので、料理法を広く知らしめるために役立ったことは間違いないだろう。

1855年12月27日の『ザ・タイムズ』に載ったソアイエの投書には次のように感謝の言葉が書かれている。

I should not have trespassed upon your valuable time were it not again to acknowledge that the good effected is entirely due to your fearless and patriotic exposure of the truth in your unique and powerful journal.

(27 Dec 1855, p. 9)

ソアイエが述べているように、『ザ・タイムズ』が戦争特派員や現地の兵士の手紙などを新聞に載せ、クリミア戦争を正確に報道したことによって、数々の善意の援助活動が実現したのである。

『ザ・タイムズ』の発行部数はクリミア戦争の頃がピークで、5万~7万部ほどだった(芝田、p. 190)。1部を複数人で回し読みしていたことを考えると、実際の読者数はその何倍にもなったと考えられる。リンカーン大統領がディレーン編集長の時代の『ザ・タイムズ』について、「世界中で最も有力な存在である」(磯部、p. 88)と述べたほど、その影響力は圧倒的なものだったのだ。

『ザ・タイムズ』の特派員レポートや編集長の社説によって、イギリス軍の戦略の杜撰さや戦地の医療体制の不備など、数々の失態を次々と暴露されてしまったアバディーン内閣は総辞職を余儀なくされてしまう。新聞が政権を倒してしまうほどの力を持っていたのである。そのような『ザ・タイムズ』を、政府が放っておくわけなかった。

1855年、政府はスタンプ税の完全撤廃を決定するのだが、これはあからさまに『ザ・タイムズ』潰しを狙って行われた改革だった。それまでも何度か減税されていたスタンプ税だが、1ペニーだけ残されていたおかげで、『ザ・タイムズ』は郵便代を別に払わずに、郵便物としてイギリス中

に送られていたのである。しかし、スタンプ税が完全に廃止されたことにより、新聞を郵便として地方に送るためには別途、切手代がかかることになってしまったのだ。その上、『ザ・タイムズ』は広告が多く入っていた分、他社新聞よりも高い郵便代がかかってしまい、その結果、地方では他社の新聞よりも高い価格で販売されることになってしまったのである。

さらに破格の1ペニーの新聞が登場し、『ザ・タイムズ』は新しい新聞との競争でも苦戦を強いられることになったのだ。ニュー・ジャーナリズムの時代になり、安価な新聞との激しい競争の中、『ザ・タイムズ』は売り上げを落としてしまう。そして経営状態を改善させることができないまま、1908年に『デイリー・メール』の創設者アルフレッド・ハームズワース (Alfred Harmsworth, 1st Viscount Northcliffe, 1865-1922) に買収されてしまうのだった。その後も権威のある高級紙というイメージは続いているが、以前のような影響力はなくなってしまった。

現在でも『ザ・タイムズ』の“Letter to the Editor”のコーナーは名物コーナーとして続いている。しかし、その内容は日々の暮らしで感じた疑問や、ユーモラスな気づきなど、たわいのない性格のものが多いようだ。ヴィクトリア朝時代の『ザ・タイムズ』は、一流の編集陣による一流の読者のための新聞だったので、“Letter to the Editor”にも世界を変える力があつたのだ。議会が招集されるのは1年のうち、せいぜい6ヶ月程度だ。しかし、毎日発行されていた『ザ・タイムズ』は、議会にも勝る活発な議論の場を提供し、社会を変える原動力になっていたのである。

文末脚注

- 1 本稿は、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第20回全国大会（2020年11月28日）のシンポジウム「ヴィクトリア朝の書簡－国政から私信まで」における発表の原稿に加筆修正したものである。
- 2 1807年にプロイセン・ホルスタインのアルトナにH. C. ロビンソンという特派員を送ったのが最初だった。特派員からタイムズ社に送られる情報は、政府に郵便で届く情報よりも早かったという。（鈴木雄雅、p. 12 参照）
- 3 “It is . . . to people we chiefly look.” 1831年1月29日の社説（p. 2）より。
- 4 処刑の日、マリアはエレガントな黒いサテンのドレスを着ていたことが新聞でも報じられている。ディケンズは、スイス生まれの侍女マリア・マニ

ングをモデルに『荒涼館』のマドモアゼル・オルタンスを書いたと言われている。

- 5 1846年2月23日、2月28日、3月9日、3月13日、3月16日の『デイリー・ニュース』に書いていた。
- 6 この社説に答える形で、11月24日付けの『ザ・タイムズ』にブライトからの投書が載っている。ブライトは、「自分のコメントはディケンズについて言ったものではない」と主張している。しかし、この投書には注意書きが付されていて、編集長がブライトの説明を鵜呑みにできない理由を挙げている (*The Times*, p. 4)。
- 7 首相だったロバート・ピール (1788-1850) ではなく、その長男である。

<参考文献>

- Bostridge, Mark. *Florence Nightingale: The Woman and Her Legend*. London: Penguin Books, 2009.
- Bourne, H. R. Fox. *English Newspapers: Chapters in the History of Journalism*. London: Chatto & Windus, 1887.
- Brake, Laurel, and Julie F. Godell. *Encounters in the Victorian Press: Editors, Authors, Readers*. Basingstoke: Macmillan, 2005.
- Cowen, Ruth. *Relish: The Extraordinary Life of Alexis Soyer, Victorian Celebrity Chef*. London: Phoenix, 2006.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 8. Ed. Graham Storey and Kathleen Tillotson. Clarendon, 1995.
- Dickens, Charles and W. H. Wills. "Valentine's Day at the Post Office." *Household Words* 1. 30 March 1850: pp. 6-12. (<https://www.djo.org.uk/household-words/volume-i/page-1.html>)
- Golden, Catherine J. *Posting It: The Victorian Revolution in Letter Writing*. UP of Florida, 2010.
- Hewitt, Martin. *The Dawn of the Cheap Press in Victorian Britain: The End of the 'Tax on Knowledge' 1849-1869*. London: Bloomsbury, 2015.
- The History of The Times*. "The Thunderer" in the Making 1785-1841. London: The Office of *The Times*, 1935.
- Hudson, Derek, Thomas Barnes of *The Times*. 1943. Cambridge: Cambridge UP, 2013.
- Markovits, Stefanie. *The Crimean War in the British Imagination*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.
- Rotunno, L. *Postal Plots in British Fiction, 1840-1898: Readressing Correspondents in*

- Victorian Culture*. Palgrave Macmillan, 2013.
- Sala, George Augustus. *Twice Round the Clock, or the Hours of the Day and Night in London*. J & R Maxwell, 1859. (<http://www.victorianlondon.org/publications/sala.htm>)
- Slater, Michael. *Charles Dickens*. New Haven: Yale UP, 2009.
- Soyer, Alexis. *A Culinary Campaign*. 1856. London: Southover, 1995.
- Sulek, Marty. “The Last Romantic War: The Crimean War of 1854-1856 and The Genesis of Contemporary Wartime Humanitarian Relief.” Conference paper, 2007. (https://www.researchgate.net/publication/271213990_The_Last_Romantic_War_-_The_Crimean_War_of_1854-1856_and_The_Genesis_of_Contemporary_Wartime_Humanitarian_Relief)
- Woods, Oliver, and James Bishop. *The Story of The Times*. London: Michael Joseph, 1983.
- 磯部佑一郎『イギリス新聞史』ジャパントイムズ、1984年。
- 芝田正夫『新聞の社会史』晃洋書房、2000年。
- 鈴木雄雅「新聞経営の先達者：ウォルター家と『ザ・タイムズ』(上)」『コミュニケーション研究』(40)2010年3月：1－14ページ。
- 星名定雄『郵便と切手の社会史：ペニー・ブラック物語』法政大学出版、2011年。

—明治大学教授

Summary

The Times and Letters

Ayaka Komiya

Newspapers in their early days were treated as letters. The government imposed a stamp duty on newspapers, but those ‘stamped’ newspapers were allowed to be sent by post without postal charges. Therefore, newsboys posted them daily at the post office, and the papers were delivered by the postman. The first newspapers were aptly called ‘news-letters’; those who wrote articles for the newspaper were called correspondents. Readers also became involved in writing letters to the newspapers. *The Times*, which was the most influential Victorian newspaper, encouraged its readers to write to the newspaper, and ‘To the Editor of *The Times*’ often became a platform for debate.

I have chosen three occasions when letters to the editor of *The Times* became the driving force for social change. The first one is a letter from Charles Dickens, written just after he had witnessed the public executions of Marie and Frederick Manning at Horsemonger Lane Gaol in November 1849. Dickens was so disgusted by the abhorrent excitement of the gathered crowds that he wrote to *The Times* declaring that public executions should be abolished. The second instance is a series of letters by war correspondents in Crimea that revealed the horrible state in which the war was being fought and urged the involvement of the British people. The third is the correspondence between a soldier in Crimea and the celebrity chef Alexis Soyer, in London, who joined Florence Nightingale to look after the provision of food in the army.

